
エレベーション・エスカレート

秋助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレベーション・エスカレーター

【Nコード】

N8043N

【作者名】

秋助

【あらすじ】

「ここから落ちたら死んじゃいますよね」

エレベーターに乗り込んだ二人

とある夏の日。箱の中の物語

(前書き)

何年か前の小説を雑に改変しました

特に後半なんてざっざっざっです。雑雑雑雑雑

うだるような暑さだった。

その日、部屋のサウナ状態に耐え切れなくなった僕は、気分転換にとコンビニへアイスを買いに行った。

僕の住んでいる部屋は、三十階もある高層構造（あ、ちょっとダジャレっぽい）マンションの三十階に位置して、飛び降りたらまず助からない場所にある。

オートロックにカードキーを差し込んで扉を開ける。

ちょうど一階で止まっていたエレベーターに乗り込んで、ボタンを押した。子どもの頃は降りたのはいいけど、昇るときは三十階のボタンまで手が届かなくて、困ったことがあつたっけ。確か、そのときは偶然同じ階の人に会ったから助かった。

そんなことを思い出しながら、閉まるドアをぼんやりと眺めていると、女の子が走ってくるのが見えた。僕と同じくらいの年齢で、十三か十四歳くらい。閉まりそうなエレベーターに入ろうとして、足を止める。

「あ」「……あ」すかさず『開』のボタンを押した。

「どうぞ」「すいません」「何階ですか？」「同じ階です」

三十階にこんな女の子いたっけな？　なんて思いながら扉が閉まる。ガタン、ゴトン、……いや、実際にエレベーター音は非常に静かなんだけどね。なんとなく。

身体が重力に押され、階数を示すランプが右に移動する。

一、二、三階と徐々に数字は増加して、十、二十、二十五階と景色が高くなってくる。二十七、二十八、二十九階と過ぎて行き、もうすぐ目的地へと到ちや、……あれ？

ランプの光が消えて、エレベーターは動かなくなった。

「……どうしたんですかね？」

とりあえず、社交辞令的に女の子に話しかけてみる。

「……………さあ」

……………これは、つまり、あれか？ 閉じ込められたってことか？ ……………。 ……………。 あー、なんとというか、密室で知らない人と二人つきりていうのは非常に気まずい。 いや、別に知り合いじゃないから無理に話す必要もないんだけど。 とりあえず、助けを呼ぶ為に緊急ボタンを「押さないでください！」……………え？……………あ、いや、その……………お願いします」「でも……………」でも、女の子が異常に涙目になっているから、聞き入れるしかなかった。 身体も小刻みに震えている。

「あの、……………大丈夫ですか？」「……………」「あの」「え？ あ、はい……………え？」「震えてますけど、大丈夫ですか？」「……………大丈夫……………だと思えます」「……………つて、自分のことなのに。 とにかく、静寂が怖いからひたすらに話し掛ける。

「三十階の人ですか？」

「……………いや、その……………、友達の家……………」

「あー……………そうですね」「見え透いた嘘を吐くな。

「……………ここから落ちたら死んじゃいますよね」

「……………はい？」

「あ、気にしないでください……………」

気にしないでいられるか。

「まあ……………、死にますね」

「そうですね。 えへへ」

一体この女の子は何なのだろうか？ とか、もうどうでもいいか。 うだるような暑さが僕の思考を駄目な子にした。 緊急ボタンを押せない以上、誰かがエレベーターの異常に気付くか、エレベーターが自然に直るのを待つしかない。

「飛び降りとか、どう思います？」

「……………は？」

「いや、飛び降りとか」

「……………だめでしょ」

「どうしてですか？」

「どうしてって……」死んじゃうから。……って、あれ？ 死んじやってもいんじゃないか？ 友達じゃないし。家族じゃないし。なんだ？ なんでだめなんだろ。テレビで 市の××さんが死にましたと聞いても『ふーん』で終わっちゃうのに。無意識に自殺しいけないことって図式を作りあげてるのかな？ だとしたらそれは僕のエゴだよな。

「私は今、幸せなのか解からないんです」

「そんなの、一瞬で解かりますよ」

「どうやって？」

「例えば、アイスが溶けただけで不幸と思っちゃうし、冷蔵庫で固め直したら、キンキンに冷えておいしいじゃんラッキー！ って、簡単に幸福にもなる。幸せかそうじゃないかなんてアイス一本で決まっちゃうんですよ。もとい、決められる。まあ、そんなこと言ったら元も子もないんですけどね」

自分でも何だそれと思った。でも、自分はそうなのだ。

女の子の顔はすぐ戸惑っていた。そりゃそうだ。幸せがどうか解からないのに、急にアイスの話なんてされたら誰でもそうなる。だけど、

「面白い方ですね」

「そりゃどーも」

ガタン。と、エレベーターが動いた。

三十階に着き、エレベーターから降りる。しかし、女の子は降りようとしませんでした。一階のボタンを押していた。

「どうしました？」

「ちょっと、友達にアイス買ってきます」

女の子は不器用に笑った。

「お気をつけて」

僕も不器用に返した。

(後書き)

雑だけどもご覧いただきありがとうございますとっございまして！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8043n/>

エレベーション・エスカレート

2010年10月10日17時24分発行